

佐渡金銀山 と 鎖国

(平成十三年五月二十七日)
(於 新宿文化センター)

只今ご紹介して下さった池田正雄さんは、旧制佐渡中学の先輩で名門の海軍兵学校を卒業されました。彼が腰に短刀を提げて学校に来ると、私ども下級生は何か佐渡の誇りのような感じがして、自らも将来かくありたいという思いを抱いたものです。ところが敗戦になったのでその道はあえなく閉ざされたわけです。しかし、伝統というのは恐ろしいもので、私と同じ千種の部落に東大の先生浅島誠さんがおりまして、(この間学士院恩賜賞という大変名誉ある賞を受けました)彼は、月ロケットを飛ばす時にイモリを乗せた男ですが、記念講演で、細菌で細菌を殺すなどと云うが、人の研究ではやっていけないというお話をしてくれました。そのとき、男の金玉に話が及んで日本人はこのままでいいのか、昔から「狸の金玉何とか」というのが冷えている程能力がよいのだそうです。そうして現代のように冷暖房完備の時代になると三代くらいで精子が減っていく、現に猛烈に減っているのだそうです。人間に蓄えられ、本来備わっているものを現代はそれを殺しまわっていて、病気になるれば医者にかかれれば何とかなる、という風に考えているが、その考え方は基本的に間違いであるというお話をしてくれました。私はこれを聞いてなるほどと思いました。イモリは夏になると体一面に瘤が出来るんですが、冬が過ぎ春になると全部瘤が落ちるのだそうです。これはロケットで上へ上へと上げてみて分かったんだそうですが、イモリを寒いところへ出しますと血管を塞いでしまって、春になると自らの力で全治する。イモリが自然の力でガンを治すのに、どうして人間は切って直そうとするのか、というのです。夏は暑いところで汗を流すのが自然です。

この間、本(『百姓の江戸時代』、ちくま新書)を書いたら好評で、編集者が来てもう一冊書けと言う。お酒に呼ばれたのでよしよしと引受けましたが、こんどの本の最初にこんなことを書くつもりであります。今から十年程前のことですが、読んだ史料のなかに、越後から冬に何千羽というカモが「塩鳥」として江戸へ送られたという話が出ていて、私には初めてだったので、塩鳥とはどんなものであるかを尋ねると、塩鳥を知らなくても新潟県人かと云われてしまいました。

捕ったカモを箱に入れ塩を詰めて江戸へ送ったというんです。そこまでは直ぐに判かったのですが、どういう方法でそんなに沢山のカモを捕まえたかということになると、百人に尋ねてもどうもすっきりしない。「そりゃ網で捕る」というので、網でどうして三千羽も五千羽も捕れたのかというと、「昔の人は捕るのが上手だった」とか、「昔はカモものんびりしていて人が寄っても逃げんかった」とかというような答えが返ってくる。そのうちに今度は、「罾を仕掛けておいて、そこへ足が入ったらさっと引く」と、そんなことで五千羽も捕れるかというのと、「越後は広いぞ、あちこちに仕掛けておけば捕れるかも知れない」、等々。ところが去年、或る谷間たにの村でその話をしたら、「あんたそんなことを知らないでよく歴史学者が勤まるなあ」と冷やかされました。また例の罾か何かだろうと思っていると、その人がお祖父さんから聞いたという話をするんです。

泥鰌を捕まえておいて、冬になったら泥鰌の中に楊枝のような竹針に糸をつけて刺しておく。冬になると雪が沢山あるけれどもカモがワーツと集まる水溜まりがあるでしょう、そこにこれをつけて置く。泥鰌を食うとカモは竹針も一緒に飲み込んでしまう。そうしてパツと追いつくと飛び立とうとしても口の中に竹針が立ってそれに糸がついておるから皆んな捕まる。ゆっくりやると竹針を吐き出してしまふから駄目。これを聞いてびっくりして、これは大変な発明だと感激して帰って来ました。なるほど、こうやれば誰でも簡単に捕れると納得しました。しかし、それだけでは、ああそうかという話になってしまふだけなので、私が何を考えたかを少し効能書きを付けて書こうと思っております。

それは、カモを捕まえる方法にしても、罾あり、竹針あり、網があり、鉄砲もあるという具合にいろいろな発想があるわけです。だから、時代が経ってくるにつれて文明とか文化とかが進んでくるという考え方には、ちょっと無理があるのではないかと思いました。昔は昔でちゃんとカモを捕まえる方法があったが、ただ百年も二百年も経つと、全く別の方法、鉄砲で捕れば、カモは鉄砲で捕まえるものだという風に考える。以前はどういう方法だったかというようなことは、知らぬ顔の半兵衛さんになってしまう。私ど

もは世の中をいつも発展するものだという風に考えがちですけれども、その時代にはその時代の方法や考え方というものがあって、それで皆んながこれまでやって来ているということが分かります。

私ができることに関心を持ったのは、今度佐渡病院が無くなるので（合併して名前が無くなるだけです）病院史の編纂をお手伝いすることになり、医療の歴史を少し調べてみたからです。本日の主題ではありません、今の方が昔より病気が減ったかといえ少しも減ってはいない。江戸時代には江戸時代の病気や医学が違って、科学が進歩したと思ってる現代と同じように、病気になって人は同じように死んで行く。いろいろなものが発明されてそれで人間が楽になったかというのと、逆に情報過多などで苦痛がより多くなったように思われます。明治の頃からどのくらい便利になりました？ 考えてみると文明が進んだお陰で病気も治り、いろいろと楽になったという錯覚を持ってしまっただけです。金が要らないようになったわけでもなし、パソコン一つ買うにも金が要ります。むしろ、発展とか進歩ということをいつも一所懸命考えるものだから、後を振り返ることがなくなってしまったんです。医療の歴史をまとめていて感ずるのは、今一番進んでいると思われる事柄が、実は百年前にも同じように、それを克服する手段があったということです。新潟大学の先生だった蒲原宏さんが先年講演されて、「今我々がやっているような医療行為というものは、百年後には全部間違いとしてみんな笑い出すに違いない」と言うんです。何だ医者ともあろう者が、とも思えますが、ちょっと考えるとそういうことになるかも知れないなあ、と思いました。

その時代にはその時代の物事の考え方があり、物事の克服の仕方があるわけです。

前置きが長くなりましたが、これから少し佐渡銀山のお話を致します。

まず最初にお話しておきたいのは、佐渡にたくさん銀が出てそれがどういふ影響・効果をもたらしたかということなんです。

佐渡の銀は一五四〇年くらいに産出されはじめ、爆発的に出てピークになるのは一六〇〇年代のはじめ、この頃が佐渡で一番銀が産出された時期であります。中国が貨幣として銀を使い、世界が銀をお金として使うようになったからです。

さて、日本では室町の頃までは金銀は宝物でありました。一三九〇年代に足利義満が金閣寺を建てたのは金が宝物であったことを示しております。金が貨幣だったらそうはいきません。また一四八〇年代に義政が銀閣寺を建てますが、私が中学の頃には、あれは義満と違って義政の頃には本当は金で建てたかったけれども金がなくて銀で建てたんだ、と習いました。でも、そうじゃないんです。世界の宝とか財宝に銀がとって代ったからです。そういうことで銀が歴史の表舞台に登場してきます。それまでも金や銀はあり勿論採れておりましたが、この時分から世界の眼が金と銀、とりわけ銀に向けられ始めたということとは大変重要なことであります。余談ですが、先年、私は『佐渡金銀山の史的研究』（刀水書房）という本を書きました。江戸時代の書物には「佐渡金銀山」は無く「佐渡銀山」です。「佐渡金山」というのは鉱山が三菱に払下げられて戦前まで使われ、その後、三菱金属にいた麓三郎さんが『佐渡金銀山史話』という本を書いてから「金銀山」という言い方になっております。私などはとやかく言われるのが面倒なものでそのようにしているだけです。

佐渡で一番沢山銀が出たのは慶長七年（一六〇二）で、記録によると家康のところへ送られた銀は一万貫（『佐渡年代記』）、これは金にして十五万両に相当する大変な金額であります。換算は銀六十匁が一両、六貫が百両。お米では一石は銀十八匁です。物を比較する場合、今のようにお米が相対的に安い時は米じゃなくて労働賃金がいいんですが、ここにお出での世代の方は、まあ大体お米で換算した方が分かりやすいようです。私なんかもお米がトンで換算されたんじゃピンと来ない。

それはさておき、この一万貫というのは掘られた銀の三分の一でありまして、残りの三分の二は掘った山師の手に入ります。これは大変な金額でありまして、加賀百万石を二つ合わせないとこれだけの収入に

○佐州（佐渡）山出金銀江戸上納高

	銀・灰吹銀
慶長18年(1613)	1, 819貫余
19年(14)	1, 659
元和1年(15)	2, 578
2年(16)	815
3年(17)	2, 098
4年(18)	3, 085
5年(19)	2, 903
6年(20)	3, 741
7年(21)	6, 230
8年(22)	5, 491
9年(23)	6, 000

慶長17以前は不詳。貫未満は省略。

(『佐渡金銀山の史的研究』田中圭一、刀水書房)

そうではなく、皆んな生きていて、佐渡の方が銀山で懐が暖かくて毎日酒だ女だと羽振りが良い、居心地が良いから故郷に帰らないだけなんです。羽振りの良いのを横目でみておりますから武士はどうしても悪く書きますが、事実は違いますからね。昔も今も変わりはありません。

この残りの二万貫というお金が世の中に流通し出すと、一体どういうことが起こされるか。これは鎖国に相当係わり合うことなんです。この貨幣を使う人たちによって、相川という鉾山都市が形成されます。城下町は皆んなこの時分に出来るんです。私どもの城下町についての習い方はとても悪くて、殿様が戦争をやるために家来を集めて町を作った、ということになっております。一面の事実ではあります。戦の本質をついておりません。殿様が家来に百姓をやめさせて町に集めようとしても、食べる米や野菜など必要物資の供給が出来なければ集まりません。お城は確かに室町の頃にもありましたが、都市を形成しておりません。都市が成立するための基本的要件は、集まった者たちがみんな消費者であるということです。消費者がそこで生活するためには銭が必要ですし、自分の欲しい物が商品として売られ、自分の銭で

はなりません。前田利家がいくら頑張っても佐渡銀山には叶わないわけでありませぬ。

当時佐渡銀山には四万人からの人間が住んでおりました。残りの佐渡の四万人が納めた年貢が銀五百貫です。ですから同じ人数で五百貫納めたのと、一万貫納めた人間がいたということでありませぬ。相川の繁栄ぶりが容易に窺えましよう。当時、武士が書いた銀山の書物を読みますと、佐渡の銀山に行った者は寿命が短くて三年もすると死んでしまつて誰も帰って来なかつた、とある。ところが実際は

買えるという世の中になっていなければならぬわけでは

これをもちたらしめたのが実は佐渡銀山の効用であります。私どもは佐渡銀山というと、たくさん銀が出て貿易するようになったというような話にとどめておりますけれども、最も大事なものは、我が国に銀が貨幣として行き渡るようになったということです。世界でも日本はとも早い時期にこうなりました。日本では江戸時代に皆んな為替制度を使って商売しておりますけれども、これに外国人がびっくりするんですね。ヨーロッパでは十九世紀になってからなのに、大坂の堂島ではもう先物取引が行われていたんです。このように早かったのは日本人の頭が良かったから、というような話じゃなくて、お金が流通したからと考える方が宜しいかと思えます。

佐渡に銀山が生まれ、それが逸早く我が国に貨幣社会をもたらしめた。そうして、そのことは、例えば私どもが百姓であれば、ああ世の中が変わったな、と感じさせることになりました。この時から百姓は物を作って城下町で売るようになるわけです。

今、私は「百姓」と言いましたが、教科書では百姓即ち農民ということになっております。しかし、これは誤りです。最近、「百姓」という言葉は差別語で貧乏人を馬鹿にするものだ、と新聞にも使わせないよう働きかける方がおられます。百姓は農民のことじゃないんです。農民という言葉は江戸時代にはなくて、明治の教科書で初めて使われるのです。以前、これに関連して越後魚沼地方の塩沢の話をしたことがあります。今日は初めて来られた方もおられますので、塩沢の百姓のことを少し申し上げたいと思えます。

塩沢というのは今の越後湯沢の辺りで、六日町から清水トンネルの所まで田圃がずっと広がっていて、のどかな農村風景に見えますが、これまで、積雪地帯の寒冷地で田圃は狭くて農民は貧しい生活を強いられて来た、と書かれた所です。しかし、この地方を調べて分かったのですが、天保四年（一八三三）の頃、塩沢組の村々の「明細帳」には、一番銭がとれるのは「縮」（織物）で一万一〇〇〇両、二番目が「宿代」



越後縮の制作（『新潟県の歴史』山州出版社）

で一三〇〇両、三番目が「米」で六一二両、…、そうして、村は全員が百姓である、と書いてあります。かつて物の本にも、この百姓は農閑期には縮を織って家計を助けた（いわゆる「農閑余業」）とある。ところが家計を助けるなんてものじゃない、この収入の方がずっと大きいわけです。縮は、女共が朝の四時に起きて夜十時まで一冬に二反織る。労働時間だけみると、それはそれは過酷な労働だと思ってしまう。昔織っていたお婆さんに尋ねてみると、「何を馬鹿言うてるか、銭になるからやっておるし上質の縮は一反織ると二両、一冬で四両取れる」。男の者が奉公人の出稼ぎで貰えるのが一年に二両なんです。縮で四両というのは五反歩の百姓の収入に匹敵しますから、魚沼の女どもは威張っているわけです。

これは絹の上州でも同じで、上州の女性は野暮と言われ、そのようでもありません（見目麗しい方もおります）、空っ風のせいではなくて、絹の収入が女性の社会的地位を上げているわけです。ですから、表立って女性の地位向上なんて言う必要がない。皆んなお金を持って独立してますからね。いざとなれば、自分は亭主の世話にはならないということ顔をしながら、そういう顔をしております。これは笑いごとですが、私どもの子供を見ればよく分かりますよね。働いて給料を貰った月だけ親父に一万円ぐらい呉れるけども、嫁さんでも貰うと後は親の世話にはならんと。喧嘩でもしようもんなら永の別れになり兼ねない。自分でお金を握る、それが独立なんです。いろいろな仕事をする、そういう連中が百姓なんです。社会で金銀が貨幣として使われるようになった途端に、城下町ができ、村から町へ商品が出るという構造になった。つまり社会全体の構造として、お金が世の中に回り始めてからは全て商品貨幣経済の時代になったということです。よく自分の所は自給自足だったという人がおりますけれども、そんなことは関係なくて、もう銭さえ出せば何でも買えるようになった、というのが中世と近世の差です。いや自分の所は何も買わなんだ、というのは個人の欲のレベルのことであって、たとえ二反歩作っても何

も買わないでいるのを自給自足だ、というのと同じ間違いです。

ですから、佐渡銀山が出来た一番大きな影響は、長崎貿易や何かじゃありません。この頃から大勢の日本人の男どもが字を書き始めますが、これは一人一人が銭を持つようになったからです。計算にしても然り、年貢の計算だって皆んな個人個人が算出しております。日本ではこういうことを四百年も続けております。イギリスなんかは、自分で税金計算するのは十九世紀になってからのことです。日本の識字率は非常に高く、十六世紀の頃日本の百姓でも随分字を書くひとが多かったんですが、ヨーロッパでは殆ど書けません。「利口」の問題ではないんです。必要がもたらしたもののなんです。

さて、佐渡から出た銀は日本の産出額の半分以上に当ります。私が調査委員をやっている石見銀山（島根）は佐渡銀山より先に世界遺産登録をしますが、産出額は精々四千貫、佐渡はその二倍半は出ているわけです。こういうことがあって銀が全国津々浦々に行き渡り商業が発展するんですけども、教科書なんかでは、「徳川幕府は、都市では貨幣経済を進め農村を出来るだけ自給自足のままにして置こうとした」などと記述している。一方から物が出ていけば、一方からそれに応じて銭が入るといのは自明なのに、「江戸時代は封建時代」ということにしたから、貨幣が行き渡ったということを否定せざるを得なくなりましたのです。

ここで世の中がどうい風にならなかっていったかをお話してみたいと思います。それは鎖国政策をとってから繁栄に伴うバブルがどのようにして整理されていくかに係わるからであります。沢山のことをお話しする必要はないと思いますので、新潟という町を例に見てみましょう。

新潟という町は、慶長の直ぐあと元和二年（一六一六）に越後を支配していた堀直奇（堀直奇）という殿様の頃に町立てされます。彼がどうい風にして町を作るかと言いますと、一つは来てくれた人には商人役（役というのは税金）を免除する、それから干し魚を納める役は免除する、酒を作る麴室役は免除する、倉庫を

建てる蔵役は免除する、要するに、税金を全部免除するからみんなここに集まってくれ、というお触れを出します。そうして出来た新しい町が新町です。それまでは今の白山神社の辺りが船着場で、関屋の新潟高校の辺りが昔の新潟でありました。この頃全国にたくさんの町が出来ます。例えば元和の頃、青森という町は、津軽藩が江戸へ米を送るために、何もない所に船着場を作って出来た町であります。その当時新潟の人口は三千人、相川は四万五千人くらいですから十分の一にも満たない。今は新潟は神代の昔からあるように錯覚して、「新潟からいろんな物資が運び込まれて云々」という話の構図が出来上がる。

元和八年（一六二二）に幕府は出雲崎を直轄領にして、佐渡へ五千五百石の米を送ります。佐渡の年貢は二万三千石ですから、出雲崎を直轄領にしたわけであります。この時、この差配をしたのが「良寛」の実家、橘屋であります。相川の中間、濁川の川口に山本さんという家があります。それが橘屋の本店です。そんな所に出雲崎の橘屋が支店を出すのも、佐渡の銀山が繁盛しなければ出来ないわけです。ですから、銀山の具合が悪くなると出雲崎も影響を受けることになります。それから、こんなこともあります。出雲崎は佐渡奉行が佐渡へ来る時の渡海場になっていて、随行員を含めて百三十人くらいが一週間ほどここで遊んでから渡って行くのが通例でした。一週間泊ったら千人分稼げるということですから、橘屋などに見れば、佐渡奉行、幕府直轄領様々ということになる。しかし、良寛が出てくる頃（十八世紀後半）になると、大分様子が変わってしまうんです。佐渡奉行は、渡海にどうもお金がかかって仕方がないと、これまでの信州越えの北国街道通いを止めて三



（『新潟県の歴史』山川出版社）

峠越えをする方が三日間も短縮出来て旅費が減らせると分ったからです。つまり出雲崎へ出るよりも三

から寺泊に出て、寺泊港から赤泊港へ出る方が運賃が安くて済むうえに、赤泊の方の運動もあって、以降出雲崎は廃れ、貧困な町里になって行きます。あとはもうずっと明治まで来てしまふ。今でもJR出雲崎駅というのがあるのですが、出雲崎町へはタクシーで行くしかありません。世の中から見放されるというのは、最初は繁栄しただけにとても惨めな感じがします。同じような例はいくらでもあるわけですが、鍛冶町（佐和田町）という所があります。銀山が繁栄した頃、大久保長安に河内（大阪）の中村から招かれた鍛冶屋さんが二十軒もあった町であります。今ではバス路線からも外れてすっかり寂れ、昔の面影はありません。

さて、先ほどお話しました領主の堀氏が、慶長の頃に出雲崎では一番の力のあった商人京屋に柏崎一帯の海岸線の支配を命じます。塩浜を作りその塩を佐渡へ送らせることにして、塩三升に米一升に替えるというお触れを出します。佐渡へ持って行って塩二升を米一升で売るんです。会津若松へ行くと塩一升到米一升、もう少し奥へ行きますと塩一升到米一升五合出さなければならぬ。塩屋が出来ると、塩を焼く釜を作る釜屋が来て、柏崎では小熊家と歌代家が出来ます。塩釜というのはとても高価なもので、しかも一つの重さが二百貫もある。それを買える程のお金がありませんから、この釜を殿様から貸してもらい、二、三年で焼き終ると、またそれを鋳物師が出掛けて行って直すということをやリ、鋳物師の商売が成り立って行くわけです。越後ではこの柏崎が鋳物師の鼻祖でありまして、皆さんご存知の沢根（佐和田町）の鋳金家本間琢齋はここからやって来て鋳物を始めますし、その本間琢齋に学んだのが初代宮田藍堂です。彼等が居なければ佐渡に鋳物師はいなかったはずだと思われまふ。

このようにして銀山の繁栄で佐渡ではいろいろな物が売られるようになるわけですが、この繁栄がもたらした功罪を二、三の例を挙げてお話ししたいと思います。

一つは煙草であります。佐渡の煙草の税金は、寛永十五年（一六三八）には三〇〇両だったものが、それから三十年後の寛文十年には四三〇両と一割五分までに落込みました。経験がおありかと思いますが、

煙草は一度吸い出すとなかなか止められない。銭がなくなつたって吸う者はいたでしようけど、全体として吸う者の数が減つて消費量が五分の一も七分の一にもなつたわけです。煙草の税金三〇〇〇両ということは、大体三万両に相当する煙草が消費されたということですから、これは大変なもので、この消費量の激減は、とりもなおさず煙草商人の衰えがいかに酷いものであったことも示しているわけです。

余談ですが、鉾山を発掘すると煙管きせるや雁首がくびが山のように出て来ます。休憩にちよつと一服というわけで、一服やっておりますれば誰にも文句は言われなかつたもので、まあいろいろ事情はありますよね。

もう一つは焼き物（陶器）についてであります。相川に、佐渡おけさを踊る背景になつてゐる春日崎の灯台があります。寛永五年（一六二八）に建てられた、実は、あれは日本最初の本格的な灯台であります。今の灯台の場所には曾て春日神社があり、繁栄を祈り神事能が奉納されておりました。この辺りは岩が沖に出ているため船がよく転覆するといふので建てられたもので、以降相当無理をしても大きな船が通るようになります。そうして相川の大間といふところに九州から来た大きな船が一週間ほど停泊する。一船に何千枚という大きな南蛮皿を積んで来ては相川で売るわけです。そうして大安寺だんあんじの前に「瀬戸物町」といふ町が出来ます。私どもの家にも大抵何枚か伊万里焼のお皿がありますよね。でも伊万里では、佐渡へ持つて行けば一番程度の悪いのでも百枚は売れると言われておりました。どこで良い悪い見分けるかといふと、伊万里では出来の悪い焼き物は下の方にどんどん積んでおくので砂が付きます。ところが、佐渡では皿の下に砂が付いてると、これは良いものだといふんです。たちまち佐渡中に広がつて、それまでの佐渡の焼き物はすっかり廃れてしまします。日本全国でも、この時期にそれまで作られていた焼き物の産業は殆ど潰れてしまします。繁栄期といふのは恐ろしいもので、人の考えがすっかり変わつてしまふ。この時分に書かれた佐渡の書物を読みますと、佐渡は日本で一番良いところだ、江戸の歌舞伎だって銭を出せばすぐにやつて来てくれる、銭があれば何も恐れることがない、といふわけです。しかし、これには若干問題がありまして、それまでであつたもの、技術などを含めまして全部ペケになつてしまふのです。です

から、焼き物一つ例にとっても、以降、「佐渡には独自の焼き物がある」と言えるようになるのは、寛政十二年（一八〇〇）相川に「金太郎窯」が開かれて、「金太郎焼」というのが始めてからです。しかも、これは佐渡の医者（時岡亮庵）^{ときおかりょうあん}が九州へ行った時に習ったものを相川の黒沢金太郎に伝えたのです。金太郎焼は、金銀精錬鉢滓（「からみ」）を施釉した佐渡独特の焼き物で、一見唐津風とも評され、お皿や土瓶や茶碗など日常の雑器が多く、素朴な味わいが特徴とされています。しかし明治の初めに無くなりまして、因みに東京国立博物館には金太郎焼「釣花生」が所蔵されています。繁栄期というのは、或る意味ではそれまで自分たちが持って来た文化を大切にしなくなる時代とも言えるのではないかと思います。これは現代でも同じことが言えましょう。



土瓶 金太郎焼（佐渡博物館蔵）



黒沢金太郎の墓（法然寺）

PRを兼ねて申し上げますが、世界文化遺産として日本の能楽（無形）が指定されました。私も「世界文化遺産を考える会」では、佐渡金銀山はいうまでもなく、現存する能楽堂や人形芝居なども一緒に文化遺産として指定してもらいたいと考えており、その準備を進めております。しかし、佐渡ばかりじゃな

くて世の中の人々がどれだけ分かってくれるかというところ、大抵の場合甚だ心許無い感じがします。両津市に日本で一番小さい能舞台があったんですが、数年前台風で壊れてしまいました。県の人々が調査に行った時には残骸が全部燃やされ無くなっておりました。たまたま部族の人に尋ねると、七面倒臭いこと言うたり言われたりするより焼いてしまえばいい、誰が訪ねて来るわけでもねえから、と。まあ簡単に言うことと左様なことでありました。惜しかったなあと言うと、そんならどうしてもっと早く言わんかと、なんてことに佐渡には戦前一〇四カ所の能舞台がありましたけど、今は三〇カ所、うち一七、八カ所は壊れかかっていて修復不能の状態です。この能舞台が十七世紀の鉾山文化である、というようなことには世間がなかなか考えてくれないんです。だって、調査で行くと、部落じゃ、来た人にはお茶の一つも出さねばならず、うるさがられる。みんなそういうことで頭が一杯なんです。このことは古文書の調査などでも同じです。昔、河原田（佐和田町）のお医者さんで中山徳太郎さんという民俗学者がおられ（柳田国男先生とも親交があった方だけども）、沢山の資料を残されました。しかし今は資料が一点もありません。亡くなってからあの資料を見せてくれとか、あの資料があったはずだとか、毎日のように応対が必要で、遺族にはいちいち煩わしくて堪らないんで全部焼いてしまった、というんです。確かに、我々のような調査員が毎日現れたらどうします？ 至極迷惑です。私だって当事者なら焼いてしまうかも知れませんが、まあ、いつもこうだとは限らないんですが、もう昔のものに用がない、という風に考えてしまう時代はあるんです。今で言えばバブルの時代がそうなんですが、丁度今日、徳川三百年の間に伝えてきた能舞台が、戦後になって為すところなく七〇余りも無くなってしまふのは、近代日本ではもう用がないという風に考えたからです。これは余計なことなんです、繁栄期（バブル）が過ぎて鎖国時代になるとどうなるかというところ、次第に独自の物が残ることの意味を学ばんです。例えば、小千谷縮とか久留米緋とかその地域だけの、余所では作れないものが登場して来て現代まで残っていくわけです。焼き物などで見た途端に、これは備前焼だとか織部焼だとか焼き物には地域特有の顔がありますよね。ただ、佐渡の焼き物は明治の繁栄期に余所向

きに作られたので、佐渡焼というのはちょっと思い当りません。佐渡の焼き物はみんな作家として、作品として作っていて、自分たちが日常普段使うためには作ってはいないんです。ですから、佐渡の旅館に泊まっても奥にしまい込まれて、滅多に伊藤赤水や長浜数右衛門の茶器だとかに出会うことはありません。値段が高いとか安いとかでは無しに、土地の人から使い始めていく、そういったことから地域に独自の物が出来ていくということがあるんです。佐渡で無名異焼を始めた一人、三浦常山（相川）が書いております。明治十一年の万国博覧会で一等だか二等をとったら、たちまち佐渡の人はもて囃してくれる、だから外で偉くなって見せることだ、佐渡に居て頑張ってみてもみんな馬鹿にする、と。こういう姿勢は子孫の私どもにもなんとなく残っておりますよね。この辺りが上げ底文化の一つのクセですが、教訓めいたことを言っても世の中が通るわけでもありません。

しかし、先程来申し上げているように、相川が繁栄して便利なものがたくさん出来た反面、独自のものが消えて行きましたが、それが良いとか悪いとかは簡単には言えません。次の時代には反省して、佐渡はそれを取り戻すようなものを残しています。他所から来てもらうのじゃなくて自分たちで能を演じたり、人形芝居をやったり焼き物をやったりするわけですから、それはそれなりに大きな意味のあることだと思います。

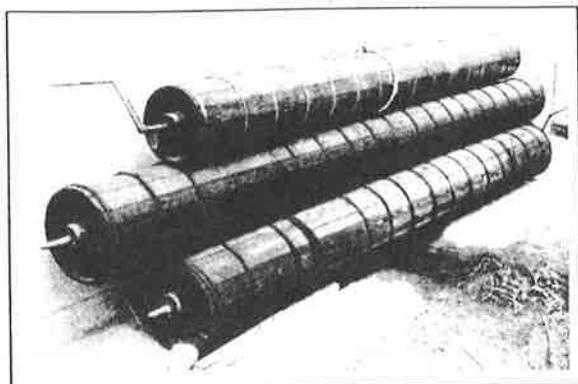
さて、これから鎖国のことに重点を移してお話したいと思います。

佐渡の鉾山が衰退するきっかけというのは、寛永十一年（一六三四）に起きた大洪水ですが、坑内の水上輪が水没してしまします。それで、山師の味方孫太夫（末裔が新潟におられます）が幕府から六七五貫（一万一千両余り）もの銀を拝借して、坑内に長さ六尺の二六〇艘の樋を立てて排水に取りかかります。この時分にはかなり坑内を掘り下げており、深さ一三〇米くらいの所から溜まった水、何万トンにもなりましよう、その水を汲み揚げることになります。樋をつなぎ、一つの樋に三人でつかまって交替で回して

水を汲み上げて川へ排水するわけです。一つの樋の値段は三両もしますから、沢山のお金を借りてこんな排水をするというのは大変な出来事と言わねばなりません。味方はもう大丈夫、ヨシこれから本格的に掘ろうとしていた寛永十三年に、また大洪水に見舞われてしまう。どうしてこういう大洪水が起るかという、天気が悪かったからには違いありません。特別な雨が降ったわけでもないんです。長年にわたって山の木を鉾山用燃料用に使ってそのままにしておいたからです。大雨の後の学校のグラウンドを想像してもらえば宜しいかと思えます。

大体、佐渡の鉾山は余り湧水はないんですが、ちょっとした雨でも水が上がって、坑内が満杯になるまで流れ込みます。戦前では地下七百米にまで掘り下げた坑内が、水没するまで流れ込むことになるわけです。ハーンそういうものか、なんて思っています。深さ七百米のところから、坑道の長さだけでも優に新潟・東京間の往復分はあるんですよ。そこに一六段にそれぞれ鉾区を設定して、一つがこの会場（百平米）位は十分にある広さの空洞がたくさんあるんですね。私は、一度だけ入ったことがあります。それは凄いいんです。ヘッドライトのようなものを点けて、いつも現在地を知らせながら這って行くんですが、二時間ぐらいで漸く三十米位の深さしか下れない。そして所々に二百米位の溝があったり、まあ一番恐ろしいのは、鉾山長が大丈夫とは言うものの、後ろから岩が落ちたりしたらもう観念してくれ、とすることです。それに、二時間物音一つしないという不気味さ、だから、もういいから外へ出してくれ、ということになる。それに、江戸の頃は便所がなくて大小便は垂れ流し、まあ想像してみてください。私の知る限りでは、最近坑内に潜ったのは大佛次郎さんだけ、『徳川家康』の作家は坑口を見ただけで、もう書けるなんて言ったそうで、こういうところでは図らずもその人となり分かってしまうわけです。

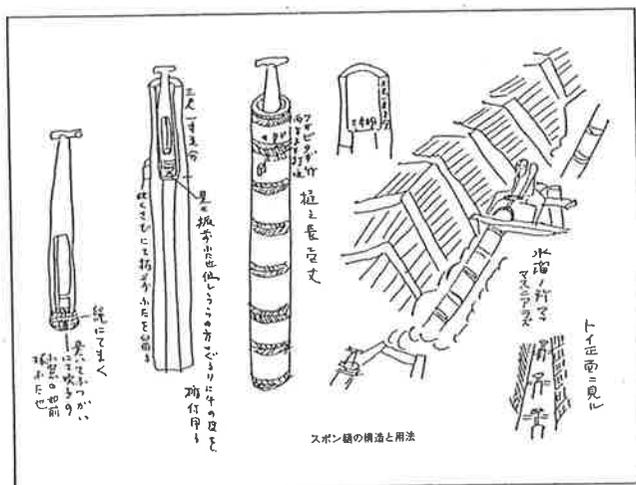
話を戻しまして、この坑内の排水に先程の水上輪という機械（アルキメデスポンプ）を使うことになるのですが、これは佐渡人が発明したものじゃないんです。味方孫太夫が大坂の水学宗甫すいがくそうほという外国の技術を持った人物を招いて、相川の長坂（大工の町）の番匠に作らせるんです。この水上輪は後に田圃の灌漑



水上輪 (佐渡博物館蔵)



アルキメデスポンプを作る職人(『新潟県の歴史』山川出版社)



スポン樋の構造と用法 (田中圭一、前掲書)

用にも使われ、今でもこれを作る職人が貝塚（金井町）におります。先年これを見せてもらいましたが、普通、筒の中の羽根が回って水が上ってくるように想像しますが、意外にも羽根は固定したままです。仕組みが分かっただけで、何のことはないのですが、日本人は、物を巻くというのがとても下手な民族といわれております。ですから、水学宗甫が来て作っても佐渡の人には分からない。それで、奉行所が「番匠が作っているところを見せてくれ」と頼んでも、見せてくれなかったそうです。技術を極秘にしていたんでしょうね。彼は大坂に帰りますが、後に長崎で「まりあ・でうす号」事件といって幕府の海軍がオランダ船を撃沈する事件が起きて、幕府からこの沈没船の船倉から金銀を回収する仕事を頼まれます。しかし、人にはそれと分からない手品のように見える仕掛けに不審を抱かれたのか、幕府に睨まれ、以後はカラクリ屋になって不遇な一生を終わったそうです。

この水上輪が登場するまでの坑内の排水の道具は、最初は「かな樋」（井戸ツルベの桶に金を巻いてある）で、一つずつ揚げて排水するもの、次は「スポン樋」（スポイトの原理を応用、トコロテンの押し出し器を逆にしたもの）を用いておりました。それに比べて水上輪は羽根で巻いて水を上げるわけで、能率がよいのでスポン樋にとって代わります。とても高価で、普通の人には作れなかった。この鉾山の割間歩（鉾区）だけで他には絶対使わず、秘密中の秘密、特許なんです。家元制度の免状のようなものです。日本じゃあ中身はともかく、忍術だって巻物にして免許皆伝していますよね。

さあ、この二度の洪水は山の木を長年伐採し放っておいた報い、今という環境破壊のために起きて、樋が坑内で水腐れになってしまふ。味方但馬はすっかり銭が無くなって江戸、大坂の家はおろか京に持っていた家も売り払ってしまう。新たに山を掘る銭は無し。これまで恩恵を享けてきた幕府が手助けしたらよさそうなものだけけれど、駄目なものは駄目ということになってしまふ。銀が出なくなると、幕府は長崎から銀の輸出を一時停止させます。一時というのは、長崎の商人の停止は困るといふ要望もあったからで、本気で停止するつもりだったのどうかは分かりません。因みに、この時分は未だ鎖国という言葉はありません。

せん。ただ、銀の輸出停止のきっかけを作ったのが、皆さんご存知の島原の乱で、キリスト教は恐ろしいぞというお触れを出して外国との交渉を禁止します。世の中の事柄というのは特定の事情というのじゃなくて、いろんな事情から出来てくるのでどれが本当の理由なのか分かり兼ねるところがあります。

鎖国に関して間違ひなく断定してよいのは、銀を輸出したら日本に銀が無くなるという事実です。それにもう一つ考えなければいけないのは、これまでのような消費を抑制しなければということ。銀がたくさん出て懐の暖ったかい人たちが町へ出て消費をすることが、もうなくなつて来たわけです。

ここで幕府は色々な対策を打ち出すのですが、その一つが寛永二十年（一六四三）の「田畑永代売買の禁令」です。何のためにこういう法律を出すことになつたのか、理解しておいて欲しいと思います。

江戸時代の少し前、豊臣の頃、大名が百姓に田畑を開墾して貰うために、百姓が開墾した田畑は帳面に付ければその所有を認める、という事をやります。そこで百姓は田畑が自分の物になるというのでどんどん開いていくわけです。田畑が検地帳に載り、所有権が生ずるわけですから、自分で売ったり買ったり出来ることになります。以来四〇〇年、今日まで日本では、ヨーロッパと違って土地は資産なんです。お金が必要な時には土地を売って工面する、というのが原則でした。酒屋を始めようと思えば、土地を売って資金を作ったのです。ですから、この禁令には事業のための投資資金を抑えたいという意図があるわけです。

いつか申し上げたことがあるのですが、これは面白い法令で、当初は罰則規定がなくて、江戸の終り頃に付きます。罰則のない法令が二百年のちに罰則がついた、ああそうか、なんて思わないで下さい。大きな意味があるんです。最初は、消費抑制の「対策」として法令が出来たのです。「対策」というのはいうまでもなく、今必要だから出されるわけです。対策なんて百年も続くものではないですし、二百年の間に制定当時とは状況がすっかり様替わりしてしまいます。ところが、この禁令に違反して罰則を受けたという者は誰一人としていない。これは誰もこの法令を守らなかつたとかじゃなくて、当面の事態に対処する、

差し向き必要だからこの法令（対策）がある。来年はどうなるか、そんなことは分からんというわけです。事実、罰則を言いながら幕府は、二、三年後に田畑の売買をしたらちゃんと名主は台帳を作って帳面に付けておけ、と指令します。禁止したのなら、こんなことを言う筈がないんです。だから、こういう法令が出されるといのは、今はバブルを抑えなきゃいけない、それで差し向きいろいろなところに投資されるのを防ごうとしたわけでありませう。

明治になって教科書を作る時に、法令には「目的」がなければ説明しにくいので、「幕府は検地帳を作り田畑を台帳に書き留め、そして農民の土地売買の自由を奪った」、という風に書かれることになってしまふ。誰しも、幕府が出す法令は百姓など民衆を統制するためだ、という具合に最初から思い込んでしまっておりませうから、法令は国民を取り締まるように出した、ということになるんです。

もっとも、実際に幕府が国民生活を向上させようと思っただかどうか、それは多分に疑問です。考えても見て下さい、支配しているのは武士なんです。武士と百姓との考え方には大きな隔りがある。これは頭の良し悪しじゃない。百姓の世の中であれば、例えば田圃を開発していくと、山に降る雨は限度がありませうから用水の問題が起きる。限度を超えて開発しろと言ったって無理ということを知っている。幕府からどんどん開発して年貢（税金）を寄せせと言われても、それは出来ませんということになる。世の中は、生産する人たちが変えていくんですよ。武士にも偉い人が沢山いたでしょうが、村をどうしようかとか、どうあるべきかなんていう目標は無いんで、欲しいのは税金だけ。ですから、武士にとっては、「今の世の中というのが一番良い、そういう仕組みが崩れて行くことをなるべく抑えねばならない」という風に考えてしまうことになる。

冒頭に申し上げましたように、江戸時代というのは、世の中にお金が沢山流通し商業がどんどん発達した時代です。豊臣秀吉や織田信長や徳川家康などが出した法令には皆んな目標があります。楽市楽座を開

きますから皆さんどんどん寄ってらっしゃい、とやって商業が発展しておりますし、検地令では、土地を開発したら台帳に登録し自由に売買させてあげます、とやります。けれども、それから後は全部、目標というものがなくて、変わっていく社会を何とか抑えようとする禁止令ばかりになる。佐渡でも、文化・文政期（十九世紀初め）の頃、お祭り、盆踊りなど一切禁止されますけれども、本音と建前の使い分けなのか、実際の締め付けは緩やかであります。これは現代でも似たようなことがありますから、直ぐ納得してもらえenと思います。自転車やバイクの二人乗りは禁止されてますが、バスの定員オーバーには目をつぶったりします。この辺はアメリカじゃあ直ぐ法律違反だとかで裁判沙汰になるんですが、日本の社会ではこのように物事を緩やかに考えるところがあつて、良い意味でいい加減なというか、こういう事で社会が成り立っているとあります。往々にして外国人に批判されますが、今でも同じであります。この経済の縮小期に余所の人には言っても、いざ自分らの生活を切詰めて縮小するとなると、とても容易じゃないです。江戸の当時とても同じです。明暦の初め頃（十七世紀中頃）、もう佐渡じゃ米が要らなくなり新潟では米四石が一両で買え、江戸ではさらに安くなるけども、買手がないから敦賀から新潟へ米買い船も来なくなってしまう。これは要するに一種のデフレ。欲しい時にはいつでも買える、金余りの時には、もう少し待てば値段も下がると思つて買うのをなるべく我慢しようとした。それで次に起きるのが飢饉。ちょっと雨が降り過ぎたとか降らんかったとかで、米が不足だと言つて右往左往、それで米が暴騰することになる。

米が不作だったら値段が上がるのは確かなんですけれども、当時の人の身の構え方というのを考えてみるとかなり派手なんですよ。余っている時には全く買わないで一粒になるまで我慢して、まだ下がるだろうと待っている。皆さんにこういう風にならないように気を付けてとは申しませんが、このクセを抜け切るために佐渡は相当苦勞することになります。貧乏になって佐渡人が一番最初にやったことは、浜で塩を作ることでした。何故かという他国から塩を買つと錢が要る、佐渡で必要な物は佐渡で作らそうと考

えるようになる。これは経済縮小期の一つのクセであります。安ければ他のところから買えばいいもの
と思っても、なかなかそういうことにはならない。縮み志向といったところでしよう。

良く考えてみると我々の今日の社会でも似たようなところをウロウロしていることは、ご承知のとおり
であります。

これから先、私どもがどういう時代を迎えるか、しかとは分かりませんが、これまで申し上げたような
問題があることを承知しておく必要があると思います。そういう意味で、江戸時代というのは、今日の日
本がやっているようなことの、いわば練習をちゃんとやってきたような時代ではないかという風に思う訳
であります。

(了)

(参考)



水上輪による水替労働（佐藤健太郎氏蔵）

（『佐渡福川の歴史』資料集10、「金鉱山水替人足と流人」福川町史編纂委員会）

(参考)

○佐渡の米価に関する指標

慶長 7年(1602)	1石=銀20匁
9年(04)	1俵(京升3斗7升)=銀51匁、 米価高値。(通常10匁程度)
寛永13年(36)	1匁=1升5合~1升3合、米高値
18年(41)	1石=銀12匁
19年(42)	1石=銀60匁、米高値
慶安 2年(49)	1石=銀12匁
寛文 8年(68)	1石=銀53匁
11年(71)	1石=銀34匁
12年(72)	他国払値段1両=1石8斗
延宝 3年(75)	1石=銀50匁
7年(79)	1石=銀44匁
天和 元年(81)	1石=銀50匁
貞享 元年(84)	1石=銀17匁
2年(85)	1石=銀30匁
元禄 4年(91)	1石=銀38~32匁
6年(93)	1石=銀39匁3分
8年(95)	1石=銀38匁 大坂相場50~54匁

○金銀銭交換指標(主として相川相場)

慶長 9年(1604)	金1両=銀60匁程度
18年(13)	金1両=銀55匁 砂金1枚=金48匁=金10両
元和 5年(19)	金1両=63匁、1両=銭7貫文
寛文 2年(62)	金1両=63匁
延宝 2年(74)	金1両=63匁
天和 2年(82)	金1両=銭4貫文
元禄 7年(94)	金1両=銭7貫文
9年(96)	金1両=銀67匁
10年(97)	貨幣改鑄
宝永 7年(1710)	貨幣改鑄
正徳 元年(11)	貨幣改鑄、銀1匁=銭48文は通用せず。 町相場銀1匁=23文
4年(14)	貨幣改鑄、金1両=銀160匁とする
元文 3年(38)	貨幣相場を変える。金1両=銀60匁、 銀1匁=銭48文 町相場 銀1匁=銭30文
寛保 2年(42)	金1両=銀130匁
寛延初(48ごろ)	銀1匁=26文(~50文)

○諸指標

- ・江戸時代1人1年間の食料=米換算1石5斗(玄米)
- ・水田1反=100刈(100束刈)、1束刈は10把
- ・100刈の年貢=京枡8斗4升
- ・賃金：明暦元年(1655)…男大工1日銀1匁2分 女8分
正徳ごろ(1711~16)…召使1人1ヵ月給銀16匁
寛延ごろ(1748~51)…下男1人 〃 錢268文
- ・役人の給料
1年20俵3人扶持(水田7反以下)が圧倒的に多い。1人扶持は1日米5合、1俵を江戸枡4斗俵とすると13石4斗。
(銀換算1石=30匁、銀60匁=金1両とすれば、約6兩3分。1石=80匁、1両=130匁とすれば約8兩となる)

(以上いずれも『天領佐渡(1)』田中圭一、刀水書房による)